美の季節

芝木好子

朝日新聞社

美の季節

定価　一六〇〇円

一九八八年十二月十日第一刷発行
一九八九年一月三十日第二刷発行

著者　芝木好子

発行者　八尋舜右

印刷所　共同印刷

製本所　清美堂製本

発行所　朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地五―三―二
電話 編集・図書編集室 〇三―五四五―〇一三一（代表）
販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

©Yoshiko Shibaki 1988年
ISBN4-02-255934-9
Printed in Japan

美の季節　目次

美の季節

薄紅の富士 13
「平家納経」の紐 16
野上先生の贈物 19
京の味 22
梅匂う 26
男友達、女友達 29
サンモリッツの眺め 33
トルコの夢 37
下町散歩 41
歌舞伎 45
三隅の桜 48
葛飾の水郷 52
美とのふれあい 55

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

外国の旅

トルコの旅 61
トルコ紀行 66
旅の中 71
シャルトルの一日 75

美味彩々

冬の味覚　ふぐ 81
湯葉の味 83
春の先ぶれ 86
土の匂い 89
佃煮 92
じゅん菜の季節 94
姿佳し　鮎 97
料理のこころ 100
蕎麦は生きる 103

湖東の旅 106
京の一日 109
大市のすっぽん 112

美味を携えて

歌舞伎の桟敷で 117
雪の金沢にて 119
雛人形 122
花の旅 124
鎌倉散歩 127
隅田川 129
夏祭り 132
山めぐり 135
仲秋の名月 138
野点 140
紅葉の思い出 143
年の瀬 146

私の好きな世界の名画

ゴッホ「オーヴェールの教会」 151
ターナー「ノラム城・日の出」 153
レオナルド・ダ・ヴィンチ「受胎告知」 155
ボナール「地中海」 157

日本の名画

下町の人々　鏑木清方「朝夕安居」 161
明治の佳人　鏑木清方「築地明石町」 163
その面影　鏑木清方「一葉」 165
春近く　鏑木清方「春雪」 167
少女の面影　鏑木清方「朝涼」 169
粋なひと　鏑木清方「初冬の花」 171
遊女憂愁　鏑木清方「ためさるゝ日」 173
躍動の美　伊東深水「鏡獅子」 175
うたたね　伊東深水「宵」 177

花と佳人　伊東深水「菊を活ける勅使河原霞女史」　179
時の流れ　伊東深水「若水」　181
優雅な集い　伊東深水「聞香」　183
七夕の夜　伊東深水「銀河祭り」　185
女人讃歌　伊東深水「鏡」　187
匂うばかり　伊東深水「吉野太夫」　189
清新な舞妓　小倉遊亀「舞妓」　191
若い瑞々しさ　小倉遊亀「少女」　193
藍のきもの　小倉遊亀「聴く」　195
日本の女たち　小倉遊亀「故郷の人達」　197

創る人

三岸さんの画室　201
顔　203
野の花　205
鋳金の世界　207
伝統を支える人々　212

折にふれて

庭の寒椿 217
樋口一葉「うらむらさき」 220
北宋の青磁 223
お別れ 225
明日はない 227
舞台の灯 232
幕があく 237
女を生きるひと 240
隅田川を行く 243
冬の眼 247
山荘にて 252
あとがき 257

装画　小倉遊亀

装丁　多田　進

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

美の季節

美の季節

薄紅の富士

仲の良い作家の女友達数人と、日帰りの小さな旅をした。冬の一日、箱根をめぐることになったのは、珍しい山菜料理の昼食と、おいしいフランス料理の夕食の予定がある、とひとりが言ったからで、そこは食べものに目がない私たちのこと、たちまち冬の旅となった。

箱根へ行くからにはお天気であってほしいが、友達の中に雨女がいる。てるてる坊主を作りなさい、と幹事に言われているのはおかしかった。

当日は快晴で、小田急のロマンスカーに乗ると、北海道からわざわざ出てきたHさんもいて、箱根は初めてだという。しばらくして車窓から雪化粧の富士が見えてくると、吹雪の北海道からきた彼女は、幸先のいい旅に目を輝かせている。私も富士を見るのは好きである。新幹線で関西へゆく時などは、いつも期待して山脈(やまなみ)をみる。右に富士を見、左に相模湾の海が見えてくると心が弾むのである。

昔は東京の町のあちこちから富士が見えたもので、私の家の二階のベランダからも晴れた日は見えた。私はよく老母を二階まで押し上げていったが、

「ああ、いいわねえ」

と言ってもらうと、自分のほうも幸せだった。今は高い家々が建って富士は見えなくなったし、老母もいない。

小田急の終点に着くと、熱海からきた友達と合流して、五人そろって山里の寺へ車を走らせた。精進料理を供する寺だそうである。相客たちと御本尊を背に卓を囲むことになった。精進の山菜料理はあっさりしているから、昼食向きである。初めてお寺のごちそうをいただいたのは福井の永平寺であったが、坊さまが胡麻をすり、野菜を炊く素朴なものに比べて、この日のお膳はなかなか凝っている。品数も多く、前菜や揚げものの盛りつけもきれいで、四人一組で取り分ける。中身は干しガキだったり、こんにゃくだったりで、おもしろい。私の気に入ったのは玩具のカップくらい、小指の先ほどの茶器で清酒を一口いただくこと。こういうお神酒はお料理を引立てるし、気が利いている。和気あいあいの一ときだった。

昼食がすむと、寺をあとにして冬枯れの箱根路へと車で向う。冬日にしては暖かく、道もすいている。歴史にくわしい友達が説明してくれて、北海道の君のために珍しい石仏を見せたり、箱根関所跡に降りたりする。みんなが初めての彼女の印象

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com